

捕食者の生態

—メキシコのシャーマニズムの見方を基軸にして—

高橋 徹（倫理文化研究センター専門研究員）

この盟友たちがいかなる機能を持っているかと質問するのは、この世界でわれわれ人間が何をするのかとたずねるようなものでしかない。われわれはいまここにいる。それがすべてだ。そして盟友たちもまた、わしらとおなじように、ここにいる。おそらくすぐ目と鼻の先に。

われわれを弱く従順で意気地なしにさせておくために、捕食者どもは素晴らしい策略を用いる。素晴らしいってのは、もちろん、喧嘩好きの策士の観点からしてだぞ。受ける側からすれば、恐ろしい策略だ。やつらはわれわれに与えるのだ。おい、聞いているのか？捕食者どもは自分の心をわれわれに与える。そして、それがわれわれの心になる。捕食者どもの心は粗野で、矛盾だらけで陰気だ。そして、いまにも発見されてしまうのではないかという恐怖に満ちている。

はじめに

今から40年以上前の個人的な話である。以下、主語を「私」とする。

私は高校を卒業してすぐにアメリカのロスアンゼルスで暮らしていたことがある。最初の5ヶ月間はユダヤ系アメリカ人の老夫婦の家にホームステイしていたが、その後、ロスアンゼルスダウンタウン近くにある老人ホームで働き、老人たちと同じビルの一室に住んでいた。19歳になったばかりのときである。

その頃、私は自分の中の〈奇妙な心の働き〉に気づいた。そういった心の働きは、中学・高校の頃もいろいろあったと思うが、現時点ではっきり思い出せるということ、またそれが後に述べる「捕食者の心」の代表的な事例になるという理由で、この頃の自分の内面の〈奇妙な思い〉を二つとりあげてみたい。

当時、私は月にいっぺんほど、東京にいる両親に手紙を書いた。手紙を書く前に、あるいは書きながら、日本の、東京のことを思い浮かべる。するとあるとき、次のような想像が広がった。

……日本のどこかで大規模な地震が発生して、東京も壊滅的な被害を受ける。それで両親を含む私の家族とは安否の確認がとれなくなってしまう。しかし、アメリカのカリフォルニアにいる自分は被害を受けずに助かる……。

この前後のイメージや思いはあらかた忘れたが、ともかくも完全な妄想、それも（家族は皆死んだかもしれないのに）「自分だけは命が救われた」というかなり自分勝手な妄想である。

こういった妄想をいだいた私は——当時、どこまで自分を客観的に見ていたのかわからないが——自分はなんと自己中心的で嫌なやつだと思い、そういった妄想を振り払った。そういったことが二度や三度はあったと思う。以上がひとつ目の事例。

もうひとつは、先に述べた老人ホームの現場でのことである。私は住み込みでおもに厨房（調理室）の掃除を任されていた。入居老人たちや従業員が夕食を終え、さらに食器洗浄が終わったあとに調理室に入って、おもに床をブラシやモップを使って掃除するのだ。けっこうな重労働である。夜の8時

頃からスタートする、一日のいちばん最後の作業なので、皿洗い担当のメキシコ系の従業員たちも自分たちの部屋に引き上げている。調理室の掃除は基本的に私ひとりで、もくもくと作業するだけ。通常は誰も中に入っていない。

私は、夕食は早めに済ませていたものの、身体を激しく使うせいか、喉も渴くし、腹もすく。仕事の手を休めて、ときどきステンレス製の大きな業務用冷蔵庫の中にある、これまた大きな寸胴鍋のような形をした金属製容器の中に入っているオレンジ・ジュースやグレープフルーツ・ジュースをヒシヤクでコップに移し、ごくごくと何杯も飲む。また、冷蔵庫のわきに置いてあった食物繊維入りのパンなどもむしゃむしゃ食べた。

そういった行為自体は特に禁止されていなかったが、誰も見ていないところで飲み食いするのは、なんとも言えない後ろめたい気持ちがあった。

また、ときどき床掃除の最中に黒人のコックが翌朝のメニューの食材が十分にあるかどうかを気にして突然やってくるなど、ときおりの来訪者もあり、掃除中なら何ともなかったが、作業を休んで飲食中のときだと非常にばつの悪い気持ちを味わった。

そうしたときに私は、この後ろめたさ、きまり悪さに、自分の中にある暗い側面、おびえ、どす黒い恐怖といった非常に嫌な気持ちをはっきり感じとった。また、誰も調理室に入ってもなくても、〈誰かがやってくるかもしれない〉という思いそのものに、恐れに似た気持ちが伴っていた。これが〈奇妙な心の働き〉の第2の事例である。

最初の事例は妄想的な思い、2 番目はびくびくするような後ろめたさである。こうした思いや気持ちをはっきり思い出し、意識するようになったのは、捕食者に関する研究を本格的にはじめた 21 世紀に入ってからである。そして理解するようになったのは、このような妄想も、後ろめたさも、私が「内省的」になりはじめた小学校高学年のころから徐々に形成された自分の心的傾向に関連し、普通であればそれをただ自分の望ましくない心のあり方としてとらえるだけだろうが、「捕食者の生態」の研究を推し進めた今の私からすると、それは捕食者が私に据え付けた心、すなわち「捕食者の心」だったということがわかった。

——以上、個人的なことをここにわざわざ書いたのには理由がある。

ひとつは、こうしたことに光を当てること自体に、私の中にある捕食者の心が抵抗するからである。つまり、

それ自体の姿が明るみにさらけ出されることを望んでいない捕食者の心の輪郭を描き出すことで、私の中にいる捕食者の意向に従わないようにするためである。

もうひとつは、このような個人的な気分の暗黒面が（たとえ、その気分の種類が異なっても）実は誰の中にも潜んでおり、それを通じて捕食者の心と生態の全貌を描き出すうえでの導入——わかりやすい糸口となる事例——となると考えたからである。小さな子供を除けば、誰の心の中にも染み込んでいる捕食者の「成分」は、それぞれ個別でありながらも、ある類似した傾向、性質を持つ。

こうした心の闇の部分は大人になるにつれ、あるいは年をとるにつれ、忘れられたり、他者に投影されたり、また何らかの精神疾患の症状となって現れたりする。それを個人の心の問題、あるいは主観的で特殊なケースとして扱うだけではなく、「捕食者の生態学」としてある程度体系的に記述できるのではないかと思い、まずはほんの一部だが、自分の事例を見本として示した。これが、ここで私が自分の過去を語った理由である。

たとえば、誰も見ていないと思うと、人前にいるときとは違うことをやりはじめる自分に気づくこ

とはないだろうか。法律に触れるような犯罪かどうかはともかく、人前ではとてもはずかしくてできないことをやる自分はいないだろうか。そういうこともまた、既述したような私の調理室での所作と共通する捕食者の心の働きかもしれない。

ここで述べたのは、人間が自分の心あるいは気持ちだと思っているものが、必ずしも本人のそれではなく、捕食者の心である場合が往々にしてあるということである。人類学者のカルロス・カスタネダは、師のドン・ファン・マトゥスと自分を比較して、自分の劣った部分、ダメな部分に関して、次のように書いている。

対する私は、愚鈍な思考パターンや習慣、自分自身のけちで不毛な配慮の虜になっている。このときはじめて私は、それらが自分のものでさえないと感じたのだった。

愚鈍な思考や悪癖・悪習がカスタネダ自身のものでないとしたら、いったい誰のものか？捕食者が人間にもたらしたものだ、カスタネダやドン・ファンは考える。

なお、ここまで読んでくださった方にはおわかりのとおり、本論で述べる「捕食者」とは、生物学などで言うそれとは異なり、人間（のエネルギー）を捕食する者という意味で限定的に使われている。そして、このような「捕食者」という言葉の使い方は、私の知る限り、メキシコのシャーマニズムの文献に限られている。その点で、誤解を招く言い方ではあるが、本論では原則としてこの「捕食者」という用語をおもに用いる。

もうひとつ付け加えておきたいのは、本論は倫理研究所発行の月刊誌『倫理』2019年1月号から4月号に連載した拙論「捕食的な宇宙・1〜4」の続編として書かれている面があることである。もちろん、本論は単独の論文として書かれたが、捕食者に関することをもっと知りたいと思う方は、ぜひ『倫理』のこの拙論も併せて読んでいただければと思う。